第12回

「荻窪の記憶」こぼればなし

善福寺川があってよかった！

杉並区に善福寺川があってよかった。ここ数カ月の間に、そう思った人は少なくなかったのではないでしょうか。

コロナ対策の自粛中、ほかに行くところも、することもない人々が、健康を考えて選んだのが善福寺川に沿った散歩だったからです。筆者も例外ではありませんでした。

善福寺池を水源に、区を斜めに横断し、中野区との境で神田川に合流する善福寺川は、杉並区だけで完結する川です。東京の川のご多分にもれず、コンクリートに固められ、巨大な地下調節池で管理されていますが、絶えず流れる水は、木々の緑とともに、町に特別な風情をもたらしています。

左の写真は、カルガモの親子。5月17日に西田端橋付近で彼らと出会ってから1カ月ほどの間、親子の姿を探すのが日課になりました。毎日、訪ねていると、川には思いがけず多くの生命が暮らしていることもわかりました。カルガモ、コサギ、ゴイサギ、カワウ、カワセミ、セキレイ、コイ、スッポン、アオダイショウ……筆者が見かけた生きものたちです。

ところで、その昔、善福寺川の水でつくった氷が、夏の涼として、江戸、東京の町に届けられていたことをご存知でしょうか。これは、『杉並区史探訪』（杉並郷土史会刊）に載る古老の話です。「現在の置田橋のそばの水田で、善福寺川の水を凍らせて天然氷を作っていました。私が小学校に入学した頃（明治三十年）は、穴稲荷のトンネルに貯蔵していましたが、間もなく傍に氷土蔵が建ちました（中田喜一郎氏談）」

氷室に使われていた穴稲荷のトンネルは、中央線のガードの近くにあり、探検好きな子供たちの遊び場になっていたため、危険だと埋め立てられ、お稲荷さんは南荻窪の旧家・梅田家の邸内に移転して祀られています。

「荻窪の記憶」プロジェクト　松井和男

Q おしりを水面から出しているカモをよく見かけますが、いったい何をしているのでしょう？

A 水草を食べている。
カモは基本的に草食で、潜水は苦手です。

※前回のコラムで、ノートル・ダムの歌を鉄幹の作としましたが、晶子の作の間違いでした。お詫びして訂正いたします。